

「M26照明弾について 緒言報告」

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生

1 入手の経緯等

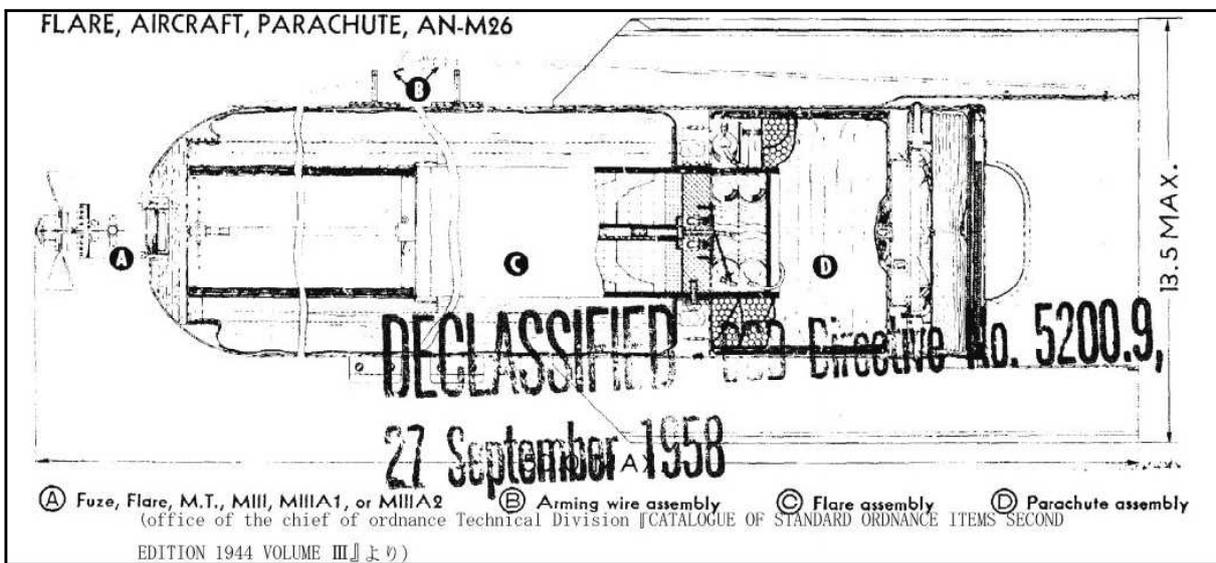
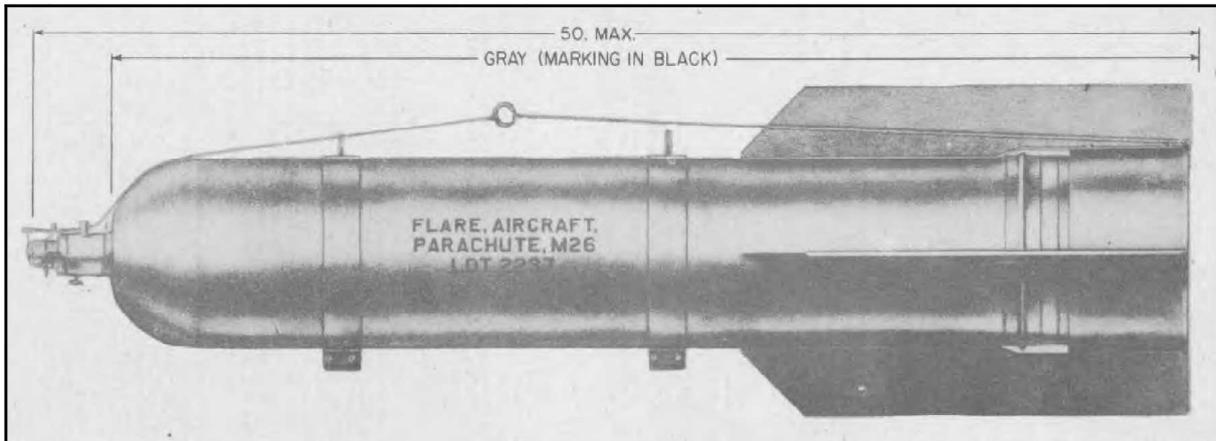
- 本資料は2023年7月ネットオークションで入手したもので、出展元は岐阜県。出品者説明によれば「(愛知県)一宮空襲時の100ポンド焼夷弾」と解説されていた。
- ここで示された「一宮空襲」について、一宮市HPより抜粋する。「一宮市が本格的な空襲を受けたのは、昭和20年7月のことでした。同月12日深夜から翌日未明にかけて侵入したB29約20機の編隊が、市内北部の葉栗・西成両地区と今伊勢町に油脂焼夷弾を投下しました。さらに同月28日午後10時頃には、マリアナ基地を飛び立ったB29約260機が本市上空に侵入し、油脂焼夷弾の波状攻撃を集中したのです」
- 一宮市立博物館学芸担当神田氏によると「一宮地名記載の“空襲予告伝単”は所蔵しているが、投下状況等は不明」、「照明弾・伝単投下器の証言は確認されていない」との事である。
- また、市民団体「一宮空襲を語り継ぐ会」森靖雄氏による著書『戦時下の一宮 くらしと空襲』等で、一宮空襲での照明弾や伝単、伝単投下器についての証言等を確認中である。

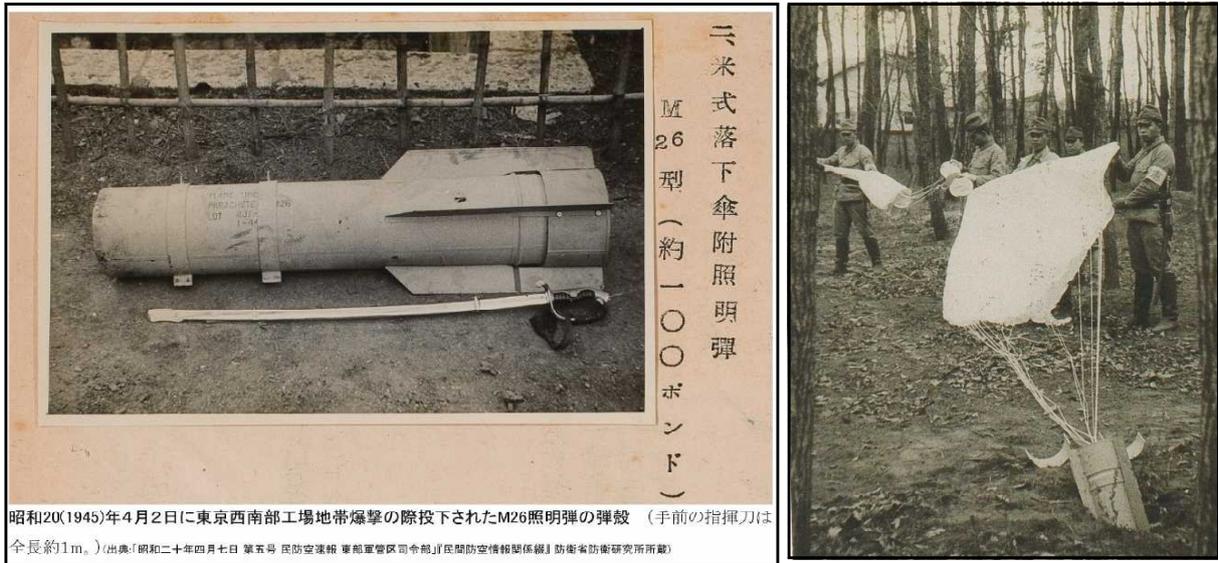


写真1 入手した「M26照明弾」

2 M26照明弾

- 一般的に照明弾とは「銃・砲・飛行機・船舶・車両などから夜間に発光する物体を空中に放ち、周囲を照らし視界を確保したり、味方に合図を行うために使用するもので」ある。材質的には、「アルミニウム粉、硝酸バリウム、硫黄をワセリン、パラフィンなどで練り合わせた物が使用されていた」とされる。





昭和20(1945)年4月2日に東京西南部工場地帯爆撃の際投下されたM26照明弾の弾殻 (手前の指揮刀は全長約1m。) (出典「昭和二十年四月七日 第五号 民防空襲報 軍部軍管区司令部」民間防空情報関係員 防衛省防衛研究所所蔵)

図1 AN-M26 照明弾 外観図

図2 AN-M26 照明弾 内部構造図

写真2 昭和20年4月2日、東京西南部工業爆撃で投下されたM26 照明弾の弾殻

写真3 地上に落下した同資料と想定される「焼夷弾を調べる憲兵たち」

※本資料は、たまや・令和元年発行『この弾薬箱のさらにいくつもの片隅に』からの引用

- 日本本土空襲において、航空機投下の照明弾は、M26 照明弾の様在空中でパラシュートが開き降下しながら照射するものと、M46 照明弾に見られる様に、弾体そのものが燃焼するもの二種が知られている。
- これら航空機による照明弾投下は、夜間での目標対象物への照準や写真撮影のための照明、地上からの対空防御を盲目とするための照射にも使用されていた。
- M26 照明弾は、丸みを帯びた弾頭と、4枚の尾翅付きの金属製弾尾蓋を取り付けた円筒形の弾体から成る。弾頭には時計式時限信管 (M111, M111A1またはM111A2) が装着され、弾尾は取っ手が付けられた輸送用カバーで閉じられる。また、吊り下げ用にサスペンションラグ2本が14インチ(約36センチ)の間隔で装備される。
- 内部には、パラシュート付きの照明装置が収められる。

3 本資料の規格・特徴等

- 本照明弾は全長119.0cm、頭部ノーズ径20.0cm、胴部から尾部にかけては楕円状に変形し尾部径18~27cm、信管挿入部径40mm、尾部の四翅とも尾翅長47.0cm、尾翅高7.0cm、吊り下げ用サスペンションラグ2本間は36.0cm、残存重量7.2kgを測る。
- 経年による劣化で、全体に錆が浮き出るが、尾部外面の一部には、当時の灰色塗装が残存し、特に弾殻内部の全面にはOD(オリーブドラブ)色が良好に残存している。
- また、弾体外観中央部には横書き三段で「上段 FLARE, AIRCRAFT, 中段 PARACHUTE, M26 下段 LOT0000」が、ステンシルフォント・黒字で描かれてい



写真4 胴体中央部のマーキング

写真5 下段黒字「KomiYama」銘



写真6：左 M26 照明弾全景

胴部中央の横書き三段で「FLARE,
AIRCRAFT, PARACHUTE,
M26 LOT ○○○○」銘

最下段に「Komiya」銘

写真7：右上 頭部の拡大状況、信管部
の開口状況

写真8：右下 尾翅部の拡大状況、外面
色の灰色と錆びの状況

る。また、弾体最下段には横方向横書きの手書きでサインフォント・黒字で「Komi yama (想定)」と描かれる。これは人名「小宮山・小見山」もしくは地名「古見(町)」とも想定される。

4 まとめ

- 本資料は、当初で示された「100ポンド焼夷弾」ではなく、形態及び記銘等から「M26照明弾」であることが判明した。
- M26照明弾は「1945年3月25・30日は名古屋、4月2日は中島飛行機武蔵製作所、4日は静岡の三菱、中島飛行機(小泉)、立川」で試験的に使用された。 ※工藤洋三氏からのご指摘
- さらに、M26照明弾には、外郭・弾殻を使用したものとして図3に示す「伝単投下器」が知られている。
- 一宮市は、末期には「空襲予告伝単・第2回」内に在地記銘されたこともあり、証言・現物資料残存等からも伝単投下がなされている。但し、地元証言等では、伝単投下器(M26弾殻使用の伝単投下器・M105 500ポンド伝単爆弾)についての証言は、確認できていない。
- 現在、全国に残された「M26照明弾」及び「同弾殻使用の伝単投下器」の実物資料の所在等を調査中である。ただ、現物確認には至っていない。
- 本資料の重要性・貴重性に鑑み、全国の自治体・市民グループ等の展示会等への貸出等を準備している。おつて本会HPより貸出規約等は紹介する。
- 本緒言報告については、工藤洋三氏・山本達也氏からの資料提供並びにご教示等をいただきました。記して感謝申し上げます。

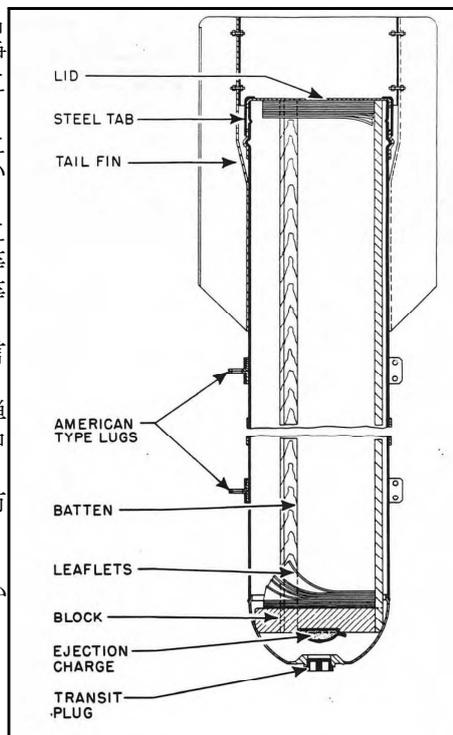


図3 M26外郭・弾殻使用の伝単投下器内部構造図「British Bomb, leflet, No. 2 MK1」より



連絡先

□くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp
HP URL https://www.kumamoto-senseki.net/